

中国古代墳墓出土の雲母片略論

門田 誠一

佛教大学

はじめに

東アジアにおいて副葬品などとして墳墓に埋納される器物としては、土器や陶器が主体となるが、それ以外には装飾品や武器・武具などが主体をなす。しかしながら、稀にはあるが、このような典型的な遺物のほかに、鉱物である雲母が発見されることがある。雲母が墓や古墳から出土するのは、中国、朝鮮半島、日本列島であり、古代の東アジアにおいて雲母の墓への埋納が行われていたことを示している。

筆者は以前、古墳時代および朝鮮三国時代の墳墓から出土する雲母片について、若干の集成と考察を行ったことがある（門田誠一 1999）。その際には、中国の古代墳墓から出土する雲母は補足的に取り上げたにとどまった。その後、漢代から南北朝期にいたる墳墓出土の雲母について、若干の事例を得たため、現状における一応の知見と雲母埋納に対する現在の私見を述べておきたい。なお、ここにあげた中国古代墳墓における雲母出土の事例は、積極的な集成による成果ではなく、その意味で管見の域を出ない。論題に略論とした所以である。これまで、古代墳墓から出土する雲母片については、中国のみならず広く東アジアの信仰ないし精神習俗と深く関係するにもかかわらず、従前は関心と呼ぶことが少なかった。知見の集成や文献記載との関連からも、未成な段階であえて、稿を示すのは、このような問題関心が高まり、雲母出土墳墓の知見が増加する契機となることを望むためである。

そのような目的意識から起こすべき本稿は、まず、東アジアにおける雲母埋納についての従前の研究をみた後、中国古代の墳墓から出土した雲母片の管見の事例を瞥見し、これについての若干の私見を述べて、これまで注意されることのなかった墳墓出土の雲母についての初歩的な知見を提示することを目的とする。

1. 東アジアにおける雲母埋納習俗に関する研究略史

東アジアにおいて、古代墳墓から雲母が出土する事実は、まず朝鮮三国時代の墳墓の調査において注目された。

具体的には朝鮮三国時代の墳墓から出土する雲母片が報告され、基本的な知見が加えられた嚆矢となったのは古新羅古墳の調査からであった。金鈴塚の発掘調査で

は積石木槨内の木棺に点在して、雲母片（白雲母）が発見され、報告では一端に孔があり、他の物資に付けられた可能性が示唆されているが、散布した範囲からみて被葬者の衣類に付けられたことは否定されている。報告がなされた時点では雲母片は東アジアにおいて類例が知られないとされており、アメリカ北部の雲母使用の民俗例があげられている。新羅古墳から出土する雲母片に注意し、詳述したきわめて早い時点での論及と位置づけられる（梅原末治 1932）。

おなじく慶州の古新羅古墳である皇南里第 82 号墳では、東側の主槨木棺内において、雲母は遺骸の銜帯の下や頸飾りの付近から多く出土していることから、報告者は衣服につけられた理路のような懸垂装飾物であろうと推定された（有光教一 1935）。

また、日本の古墳から雲母片が出土することは、個別報告としてはなされていたが、これに関してふれた専論はみることはなかった。これをうけて、筆者は古墳出土の雲母片について、現時点での報告例を中心に集成を行うとともに、朝鮮三国時代の墳墓から出土した雲母片についても事例を示し、若干の中国古代墳墓の出土例と比較、検討した。その際、本稿でも述べる神仙思想・道教の文献にみられる仙薬としての雲母の記載と墓の内部に埋納して、遺骸の腐敗を防ぐ、という二つの雲母の効用に注目した。そして、これらはともに水に腐朽せず、火にも耐えるという仙薬として重用される雲母の性質から出ていることから、墳墓に雲母片を埋納することは神仙思想に基づく道教的な習俗であると論じた（門田誠一 1999）。

いっぽう、管見の限りでは中国古代の墳墓から雲母が出土すること自体について、包括的な論考は寡聞にして知らない。そのなかにあつて、謝明良氏は六朝陶磁器に関する論考のなかで、西晋代の墳墓出土品の一例としてあげている（謝明良 2006）。

また、個別の事例に関しては、北周・田弘墓の報告書で、報告者は「輿」または「輦」の装飾として雲母が使用されていた可能性を示した（原州聯合考古隊 2000）。

このように魏晋南北朝期に該当する東アジアにおける葬送習俗としての雲母の埋納について、とくに中国での出土例については、現今では専論としての研究は寡聞にして知らない状況である。

2. 中国古代墳墓における雲母埋納例

ここまで研究史の摘要のなかで、おりにふれて瞥見してきた日本の古墳時代および朝鮮三国時代の雲母片出土例以外に、中国の漢代から南北朝にかけての墳墓に雲母片が埋納される。以下では、管見の限りで、この時期の墳墓の雲母出土例を瞥見し、次項以下での文献との相関的な検討に資することにしたい。

(1) 陝西省咸陽・師範学院科技苑工地楼基内1号漢墓(劉衛鵬 2006)

2006年に発掘調査され、簡報が提示されている。M1は大型の多室墓で、東西方向に築かれ、平面形は「甲」字形を呈する。墓道、耳室、墓室と陪葬坑から構成され、全長は25.4m、深さは14mを測る。

南側に3室と北側に2室の耳室があり、車馬を中心とした大量の遺物が出土した。墓道の西側に近接して、1基の陪葬坑が発見されており、すでに盗掘を受けていたが、ここから陶耳杯片や獣骨とともに大量の青緑色の雲母片が出土した。

墓内からの出土品としては、鉄釜、五銖銭、銅製四葉座形金具、陶罐、陶製奩などがあり、これらの出土遺物から、後漢晩期頃と推定されている。

(2) 河南省泌陽・板橋31号墓(河南省文化局文物工作隊 1958)

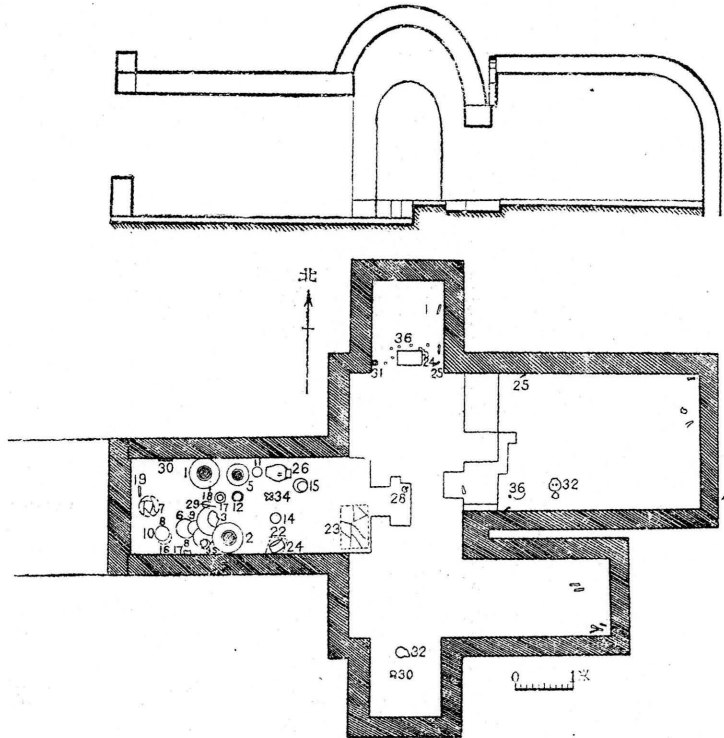
河南省泌陽県で1951年に発掘された31基の墳墓のうち、23基が漢代に属すと報告されている。そのなかで31号墓は二つの耳室と二つの後室を備えた複室の磚室墓で、とくに甬道部分に多数の副葬遺物が残存していた。この甬道に置かれた陶器や陶製明器とともに雲母片が出土していることが、平面図と遺物の出土位置図および出土遺物一覧表によって知られる(図1-1)。報告書では、この31号墓の築造時期は、同時に発見された墓の墳墓とともに後漢晩期とされている。出土遺物の詳細が報告されていないため、時期推定は難しいが、31号墓が複雑な構造の複室墓であることからみると、後漢代でも後半期に属することは推定してよからう。

この事例は漢代の墳墓から雲母片が出土することを報じた早い時期の報告であり、その点で重要であるとともに、雲母片の出土位置が図示されている点でも、1950年代の報告としては貴重である。これによって、後漢代の墳墓では、甬道に陶器などの副葬品とともに雲母片が置かれることが知られた。

(3) 敦煌・仏爺廟湾3号墓(甘肅省敦煌県博物館 1983)

敦煌では東晋の「咸安五年」(375年。ただし実際には咸安の元号は2年まで)の紀年を朱書した陶罐が出土した仏爺廟湾3号墓から雲母片の出土が報じられている。墓室は方形を呈し、甬道側の二つの隅が円形にふくらみをもつことが、この墓の平面形の特色である。東西に二つの木棺が置かれ、東側棺内では被葬者の胸にあたる部分から雲母片が3片出土したと報告されている(図1-2)。雲母片は平面形が円形を呈し、直径2cmであり、円孔が穿たれていた。このことによって、雲母が被葬者の服飾品や遺骸を覆うための繊維製品や革製品などの有機質の素材に付けられていた装飾であることが推定される。

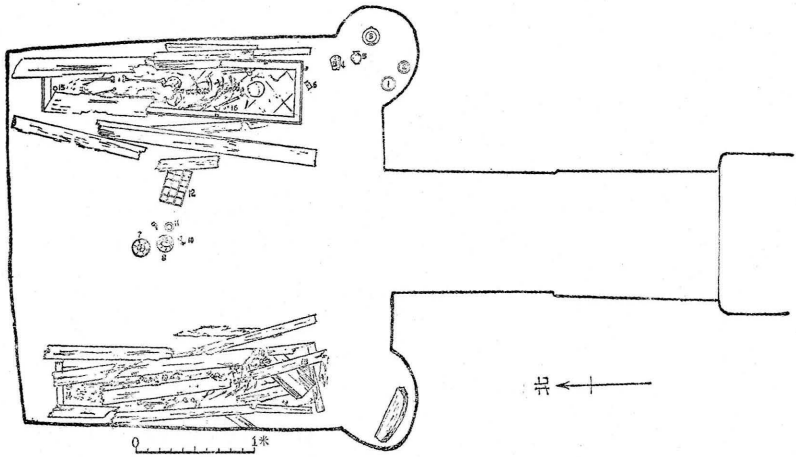
この例からは、東晋代に併行する前涼から後涼の時期に、西域においても、葬送



圖十 墓 31 平、剖面圖

1—6. 陶罐 7. 陶碗 8. 陶盒 9—11. 銅鎗 12—15, 28. 銅環 16. 鐵冊 17. 銅器 18. 鐵箭頭
 19. 鐵刀 20. 鐵錐 21. 銅飾 22. 陶案 23. 陶方案 24. 陶套 25. 鐵飾、釘 27. 陶器 29. 鐵器
 30. 鐵三角形飾 31. 銅製帽頂 32. 人頭骨 33. 骨飾一組 34. 雲母片 35. 石塔 36. 鐵環

圖 1-1 河南省泌陽·板橋 31 号墓 (甬道部分 34 為雲母片)



圖八 80.D.F.M3 墓室內部器物分布圖

1, 2. 陶直腹壺 3. 陶鸡首灶 4. 陶倉 5. 陶罐 6, 13, 14, 15. 朱书陶罐 7. 陶果盒 8. 陶盤 9. 陶盆
 10. 陶灯座 11. 陶碟 12. 漆多子盒殘迹 16. 雲母片 17. 五銖錢 18. 陶罐碎片 19. 陶鉢碎片

圖 1-2 敦煌·仏爺廟灣 3 号墓 (東棺内から雲母片出土)

圖 1 雲母片出土墳墓

に際する雲母の利用が存在したことを示している。

(4) 山東・曹植墓（劉玉新 1999, 護善煥 1996）

山東省東阿県の魚山西麓にある曹魏の東阿王曹植の墓とされる遺跡である。この墓は甬道、前室及び後室の三つで構成される磚室墓で、前室は正方形で、4.35 m²であり、後室は長方形で長さ 2.20m、幅 1.78m であった。前室の天井はアーチ形で、後室と廊下（甬道）の天井は穹窿状天井である。

後室には棺が置かれており、出土遺物としては、主体は陶器や陶製明器であるが、その他には瑪瑙製垂飾などの装飾品も出土している。棺の内部は3層の堆積物が認められた。底層は約3cmほどの厚さで木炭の灰を敷き、中間層には大きさが豆ほどの朱砂を、上層は薄く切られた雲母片で日月星辰の模様を造ったものを敷いており、その上に、遺体が安置されていた。遺骸は雲母片の上に置かれていたが、発掘時点では一部を除いて腐朽していた。出土遺物としては陶器や陶製明器が主体で、それ以外には壁や璜などの玉器や赤瑪瑙や青玉などの装飾玉があった。陶器のなかには肩の部分に「丹藥」銘の印刻のある四耳罐があり（図2-4）、この墓の葬送思想には神仙思想および道教的信仰が存在したことがわかる。これによって棺の内部に敷き置かれた雲母も、遺骸保存の目的があったと考えられるが、その行為は陶罐の「丹藥」銘に示されるような神仙思想および道教的信仰によるものであることが類推できる。

(5) 江蘇・宜興晋墓（羅宗真 1957）

1953年に宜興県城の内部で2基の前・後室からなる複室の磚室墓が発掘調査された。このうち、2号墓から雲母片2点が出土したと報告されている。この雲母片についての記述としては、色調が白色透明であり、「朱砂」が付着しており、長さが2.2cmで平面形が「半月形」とあるのみで、出土位置や出土状態などについての記載はない。ただし、この記載から雲母には穿孔などはされておらず、また漆なども施されていないため、雲母片として副葬されたものと考えられる。

1号墓は「元康七年九月廿日陽羨所作周前將軍磚」「元康七年九月廿日前將軍」などの有銘磚の出土によって、呉から西晋にかけての武将であり、元康7年(297)に死んだ周処の墓であることが判明している。雲母片が出土した2号墓は盗掘を受けていたが、小児の人骨が出土したことから、夭折したとされている第4子である周靖を含めた周処の一族が葬られていると推定されている。よって2号墓の築造年代も周処墓とほぼ同時期であり、3世紀後半から末頃と推定してよからう。

(6) 南京・仙鶴觀6号墓(南京市博物館 2001)

江蘇省南京市仙鶴觀墳墓群の6号墓は単室の磚室墓で、墓室内からは東西に配置された2基の木棺の痕跡が確認された。出土遺物の様相をみると、東棺からは鉄剣が副葬されていたことから、被葬者は男性とみられる。西棺には多数の装飾品が副葬されていたことから、被葬者は女性と推定される。西棺出土の遺物としては、細金粒細工の蟬形冠や銀鼎をはじめとする多数の金銀製品、漆器、青磁、玉器、カットグラス碗、水晶玉、雲母片、銀鈴、金鈴などが報告されている(図2-1)。年代は東晋前期頃の4世紀前半～中頃と推定されている。この墓は東晋の名臣である高悝とその妻の合葬墓と推定されており、王氏一族の象山墳墓群と並び、南朝墓では最も充実した内容を示している。

この墓では雲母片が2箇所で見出されたことが報じられている。一つは副葬された鍍金が施された蓋付の銀製鼎の内部から発見された(図2-2)。この鼎は口径2.3cm、高さ2.7cmと極めて小型であり、おそらく、雲母片を納めるために副葬されたと考えられる。内部から出土した雲母片は、ごく少量であり、碎片となっていたと報告されている。

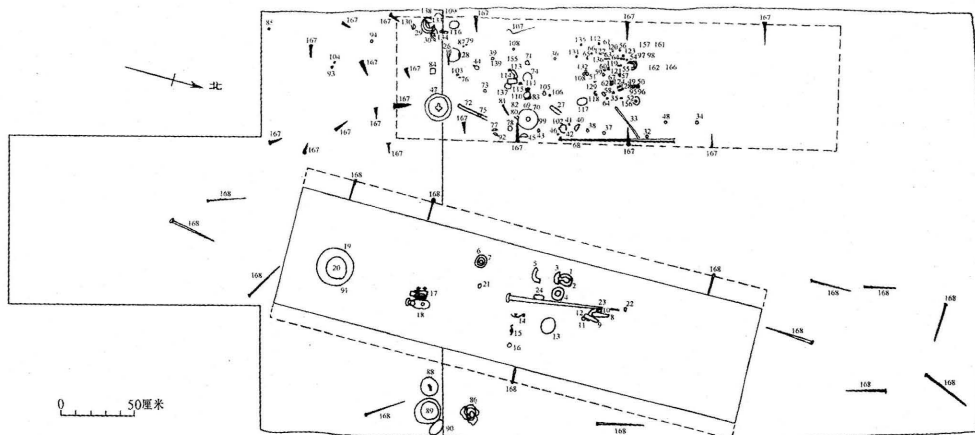
また、これとは別に西棺内の本来は遺骸が置かれていた周辺から雲母片が出土している。雲母片は平面形が扇形と円形とがあり、扇形のもの、残存長が7.4cm、幅が2.7cmで、浅い陰刻で周囲に圈線と小孔とが施されている。円形の雲母は残存径6cmで、周囲には小孔が配されている(図2-3)。

銀製鼎の内部から出土した雲母は碎片の状態であることから、後にふれる文献記載にみえる雲母粉に該当するとみられ、仙薬として副葬された可能性がたかい。また、西棺の内部から出土した雲母は装飾として、器物か有機質の布や皮などの製品に付けられたものと考えられる。

(7) 江蘇・丹陽呉家村南朝墓(南京博物院 1980)

1968年に丹陽で見出された2基の磚築墓のうち、呉家村の墓葬は平面凸字形で甬道と墓室から構成される全長13.5mの墓室からなる磚築墓である。この墓を構成する磚のなかには、壁面には磚を組み合わせる画像を構成する磚画があり、その画題が竹林七賢と榮啓期を表現している。

出土遺物としては南朝墓に通有の青磁類や陶製明器などのほかに、特徴的なものとして、石馬、石製祭台などがあつた。その他にも断片であるが銀製装飾品や雲母片が出土している。雲母片に関して、報告書では「雲母飾」と記述されているが、具体的な雲母片の出土位置や出土状況および形状などの詳細は報告されていない。この墓の年代は出土遺物などからみて、南朝の齊代に属するとみられている。また、



图九 M6出土遺物分布图

- 1,2. 玉璜 3,5,12. 玉珩 4. 心形玉佩 6. 玉环 7. 玉柄饰 8,9. 玉猪 10,11. 玉珠 13. 漆唾壶 14,15. 玉带钩 16. 水晶珠
 17. 铜弩机 18. 鍍金铜砚滴 19. 铜砚 20. 漆盘 21. 玉剑首 22. 玉剑璫 23. 铁剑 24. 玉剑格 25. 玉剑栝 26. 铁剪刀 27.
 33. 金钗 28-31,47,84,109. 漆盖 32,37-39,46,70,73,99,106. 花形金片 34,35,94,101,102. 桃形金片 36,103. 不规则形金片
 40,45,92,108. 云母片 41,56,63,66,119,121,136,139-155,157-166. 料珠 42. 蝉纹金饰 43,51,55,60,120,122. 金辟邪 44. 松香球
 48,93,104. 金环 49,50. 铜钱 52,54,74,95-98. 金匱 53,65,112. 绿松石辟邪 57,79,82,87,110,124-128. 金珠 58. 琥珀兽
 59. 金比翼鸟 61,129. 金羊 62. 银铃 64,118,123. 琥珀珠 67. 金铃 68. 鍍金铜支架 69. 铁镜 71. 铜铺首 72. 银箸 75. 鍍
 金银鼎盖 76,100. 圆形金片 77,130. 漆耳杯 78. 鍍金银鼎 80. 铜耳杯 81. 铁书刀 83. 玻璃碗 85. 金顶针 86,89. 瓷罐 88.
 90. 瓷器盖 91. 蜡板 105. 陶壶 107. 金耳挖 111. 丹丸 113-115,138. 漆器铜镶饰 116,134. 铜环形钮 117. 偶 131. 方形玻
 珀饰 132. 金龟 133. 漆盒 135. 绿松石珠 137. 漆篋 156. 料兽 167. 铁棺钉 168. 铜棺钉

图 2-1 南京·仙鶴觀 6 号墓 (西棺内に雲母片が散在)

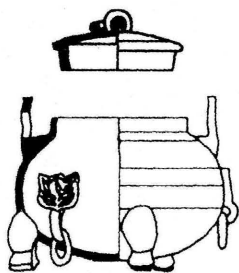


图 2-2 南京鶴觀 6 号墓出土鍍金銀製鼎

(内部から雲母片出土)

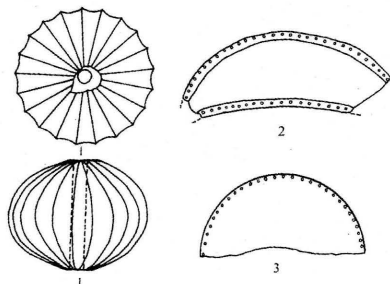


图 2-3 南京·仙鶴觀 6 号墓西棺出土雲母片

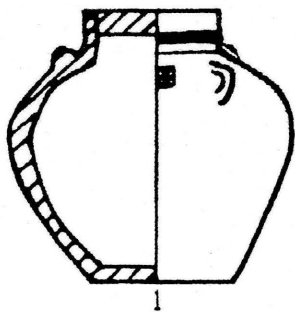


图 2-4 山東·曹植墓出土「丹藥」銘陶罐 (左) と
 「丹藥」銘部分 (右)

图 2 雲母片出土墳墓と関係遺物

墓壁には「竹林七賢」図磚画が嵌められていたことから、皇帝陵である可能性がたかいたと考えられる。墓誌などが出土していないが、報告書では呉家村南朝墓の被葬者として、文献の記載としては残っていない南斉の和帝である肖宝融の恭安陵と推定している。

(8) 河北・磁県北朝墓 63号墓 (河北省文物管理所 1979)

魏から北朝にかけての都城である鄴城遺址の西北約6km地点に所在する河北省景県で発掘された北魏代の高氏墓群のなかで、13号墓とされた高雅夫婦と彼の娘たちあわせて4人を合葬した墓から、金箔とともに雲母片が発見されている。この墓は中央の主室に高雅夫婦を埋葬し、北側と東側に耳室があつてここにはそれぞれ第2子である高德雲と彼の長女で北魏・孝明帝の妃となった高元儀が葬られていることが、伴出した墓誌から判明している。高雅は北魏末の熙平3年(518)に死んだが、東魏の天平4年(537)年に詔書によって改葬されている。報告文に示された図を参照すると、この墓では主室に葬られた高雅とその妻の遺骸の周りに散在した状態で金箔と雲母片が出土している。雲母は平面形が扇形で紙のように薄く、その出土状態について、報告者は本稿でも後述する『太平御覧』や『西京雜記』にみられるような墓内に撒かれた雲母の記述と一致するとし、雲母片と金箔は本来これらを綴じつけて衣服の形態に仕立て、死体に着せ掛けたものであつて漢代に盛行した玉衣に類似したもので、あるいは玉衣の意味が残ったものかもしれないと述べている。これが形骸的な玉衣の遺制である可能性も考えられるが、それよりも、むしろこのような雲母の出土例は葬送習俗の面からは次にみるような墓や埋葬に関連した雲母の記述と関連するものであろう。

(9) 北周・田弘墓 (原州聯合考古隊 2000)

北周(566~581)の将軍である田弘の墓は寧夏回族自治区固原県にあり、発掘調査によつて、墓道、天井、過洞、甬道と主室・後室・側室から成る墓室が明らかになった。この墓からは、雲母板に金箔を貼り付けた後、忍冬文などの文様に切り抜いた破片345点が出土しており、報告者は「輿」または「輦」の装飾として雲母が使用されていた可能性を考えている。ただし、雲母片を綴じ付けるための孔があるものは見出されていない。このことから、筆者は本来、乗り物や什器などに用いられていた雲母が葬送儀礼の過程で散布された可能性も考慮に入れる必要があると考えている。

3. 装飾としての雲母

以上のような実際の出土例のほかに、文献的には雲母は車駕の装飾や屏風などに用いられた。

このような雲母を用いた装飾品は正史にもみられ、たとえば新の王莽は常に雲母屏面すなわち雲母で飾った扇のようなものを顔の前にかざしていたため、親近する者でなければ、その顔を見られなかったという（『漢書』王莽伝）。

また、西晋や劉宋では、追鋒車・雲母車・四望車の制があったという（『通典』巻65・礼25・沿革25・嘉礼10・公侯大夫等車輅）。このような雲母車（あるいは雲母安車）という車駕の正史における記載は、管見では『隋書』礼儀志に北魏の故事として記述が最後となることから、主として南北朝以前に行われた車駕の制であると思われる（『隋書』礼儀志）。

劉宋代の朝服に関する規定のなかで、純金銀器とともに雲母の使用が禁じられていることからみても（『宋書』巻18・志第8・礼5）、雲母は奢侈品と認識されていたことがわかる。

『芸文類聚』には「雲母屏風」「雲母扇」などの雲母を装飾として用いた器物や什器がみられる（『芸文類聚』第46巻・職官部2・太尉）。

雲母の屏風を詠み込んだ唐代の詩として名高い李商隱の「嫦娥」の一節を引くと、「雲母の屏風，燭影深し。長河漸く落ちて，暁星沈む。嫦娥は応に悔ゆるべし，靈薬を偷みしを，碧海，青天夜夜の心」とあり，雲母を張り詰めた屏風にはろうそくの影が深々と映り，ここでは雲母を張り詰めた屏風に蠟燭の影が深々と映り，ひとり寂しい夜を過ごしている様子を主題としている。

おなじく「雲母扇」は『芸文類聚』のような類書には，詩句としてあげられている。たとえば，贈任黄門詩にみられる雲母扇の如くである（『芸文類聚』巻31・人部・15／贈答）。

以上のように，ここでは文献の記載をあげて，器物の装飾としての雲母の用途があることを示した。

4. 神仙思想・道教における雲母

装飾としての雲母の使用に比して，東アジアの古代墳墓から出土する雲母を理解する際に参考となるのが，雑録記事や説話にみられる遺骸保存のために用いられる雲母である。

たとえば，前漢代の雑事を録したとされる『西京雜記』などにみえる墳墓に関する説話がある。そこには，つぎのような雲母の使用法がでてくる。春秋時代の晋の幽王の冢は高く壮大であったが，墓門はすでに開いていた。石や漆喰を取り除い

て1丈余りの深さに達すると雲母が深さ1尺あまり積もっており、百余りの遺骸が縦横に重なりあっているのが見えたが、すべて腐乱しておらず、ただひとりのみが男性であとはすべて女性であった。ある者は座り、ある者は臥し、またある者は立っており、衣服や容貌、顔色は生きている人と異ならなかったという（『西京雜記』巻6）。

戦国時代の魏の王子である且渠の冢は墓穴が浅くて狭く、棺や柩はなかったが、ただ幅6尺、長さ1丈ばかりの石の寝台と石の屏風があって、それらの下にはいずれも雲母があった。寝台の上には男と女の二つの屍があって、どちらも年は20歳ばかりで、ともに東枕であって、裸で衣服はなかった。肌艶や顔色は生ける人のようで、鬢や髪の毛、歯や爪もまた生きているようであった。魏王はこれを恐れ怪しんで敢えて近づかず、元のように扉を閉ざして帰った（『西京雜記』巻6）。

また、『太平御覧』に引く「東園秘記」という逸書には、雲母で死体を覆うと、死体は朽ちはてないと述べ、その例として以下の話をあげている。国中で第一等の美人であった馮貴人（皇后につぐ女官）が亡くなって十数年後に盗賊が墓をあばいたところ、容貌は生前のようであり、ただ体が冷たくなっただけであったので、盗賊はみなで貴人の体を犯したが、後に捕らえられた。この賊が言うには貴人の棺には数斛の雲母があったという（『太平御覧』巻808所引・東園秘記）。

李時珍も『本草綱目』のなかでこれらの記述をとりあげており、昔の人の話に聞くとして、さきにふれた晋の幽王の墓の話や馮貴人の墓の話を紹介し、このように屍体が朽ちないのは家中の棺の内部に雲母を詰めていたからだと説明している（『本草綱目』金石部第8巻・雲母・發明）。

これらは事実を記したものかどうかは別にしても、中国古代人たちの雲母に対する認識の一端を示しているものとみてよかろう。すなわち、彼らは雲母のもつ靈妙な力によって、亡骸を生きた肉体の如く保つことできたと考えていたのである。

いっぽう、このようないわば遺骸を保存するための雲母とは別に、神仙思想とこれをうけた道教では、仙人になるための薬すなわち仙薬としての雲母の使用方法がある。仙薬とはいうまでもなく不老不死の仙人となることを目的として服用するものであって、仙人になるためには良き師によって精勤に学び、また、名山に入ってさまざまな修行を行わねばならないが、これらの目的は仙薬をつくることにあり、これを欠いては仙人になることはかなわない。また、ひとくちに仙人といっても、段階があって最上のものとして、肉体はそのまま虚空に昇る天仙、次に名山に遊び、あるいは名山に入ってから昇仙する地仙、その下位には肉体としての屍体を残して魂のみ昇仙したり、屍がなくなる屍解仙がある。そして、仙人として最上の天仙になるための仙薬として不可欠のものが丹と金液であって、これなくしては不老

不死を得ることはできない（村上嘉実 1956, 吉田光邦 1963・1972, アンリ・マスベロ 1966, 窪徳忠 1948, 大形徹 1992, 吉川忠夫 1995）。

西晋に生まれ、東晋に没した葛洪の撰になる『抱朴子』内編第4は「金丹編」として、仙薬について述べられており、そこに出てくる丹には多くの種類があるが、ほとんどが丹砂すなわち、硫化水銀を主成分として、これに砒素化合物や硫黄などを加えたものである（『抱朴子』内編第4・金丹）。また、金液は黄金を主成分とした化合物であるから、丹や金液の精製には莫大な費用が必要となる。

この他に仙薬として用いられるものには玉石すなわち鉱物や岩石そして植物などがあり、後世において復元を経ながらも、最古の本草書として知られる『神農本草経』ではそれまでの薬物を上薬、中薬、下薬に分類しているが、雲母はこのうち120種の上薬のなかにあげられている。雲母を含む上薬とは「養命」すなわち命を養う仙薬とされている（『神農本草経』序録）。

『抱朴子』内編第11にみえる「仙薬」の1種としての雲母の記載をみると、雲母には5種類あって、みかけでは区別がつかないという。また、雲母はそのままではなく、他の鉱物等と混ぜ合わせたり、加熱したり、土中に埋めるなどしてから服用するという方法についてもふれられている。そして、このようなものを1年間服用すれば、あらゆる病気を除くことができるのであり、3年間服用すれば老翁が童子にもどり、さらに5年間欠かさず服用すれば、鬼神を使役できるようになり、火に入っても焼けず、水に入っても濡れず、棘を踏んでも、膚に傷がつかず、仙人と会い見ることができるとしている。また、5種類の雲母は猛火の中において時を経ても燃えず、また、水に永く入れておいても腐らず、それゆえに人をして長生させられるのであると述べている。さらには雲母を10年間服用すると、その人の上に常に雲気が覆うなどと述べられている（『抱朴子』内編第11・仙薬）。

雲母を用いて仙人になった例として、中山（現在の安徽省）の衛叔は久しく服用して雲に乗って飛べるようになった、とある。さらに、その処方玉匣に入れて封じておいたが、本人が仙人になったあと、その子である度世と漢の使者である梁伯がこの処方を手に入れ、そのとおりに服用してみると二人とも仙人になって昇仙した、という話が載せられている（『神仙伝』巻2・衛叔卿）。おなじく葛洪の『神仙伝』にも雲母を服用して仙人になった例として衛叔があげられており、ここでも衛叔が梁伯に神仙になるすべを教えた時に、梁伯が玉匣から取り出したのは「飛仙の香」というもので、それは五色の雲母であって、梁伯と子の度世はこれを調薬して服用し、仙去したという（『神仙伝』巻2・衛叔卿）。

他にも雲母を用いた例が『列仙伝』にみられる。この書物は前漢末の劉向の撰と伝えられるが、一般にはこれとはならず、三国時代から南朝頃の作とみられている。

『列仙伝』のなかで、雲母を服用した仙人の代表的な例として方回の話があげられる。彼は「堯の時の隠人」というから説話の中に生きたのである。堯に閭士として招かれた彼は雲母を練って食べ、人民の中で病ある者にも与えたという（『列仙伝』巻上・方回）。

北宋代の太平興国2年（977）に勅撰された『太平広記』は唐代までの野史伝記、小説諸家にみられる神仙および道士、約350人の説話が収録されている。そのなかで彭祖は般代の末にすでに767歳であって、補導之術というものを行い、常に水桂、雲母粉、麝香散を服用したという（『太平広記』巻第2・彭祖）。

正史の隠逸伝にみられる記事から一例を拾遺しよう。梁の武帝が篤く敬い信じた鄧郁は年若くして衡山の峻峰に隠棲し、2間ばかりの板小屋を建てて住み、山を下りずに穀類を断つこと30年以上、その間、谷水と雲母屑だけを口にし、日夜、大洞経を誦した。鄧郁は武帝のために丹薬を調合したが、帝はこれを服さず、楼閣にこれを貯え置いた、という（『南史』巻76・列伝66・隠逸下・鄧郁）。

正史に列伝をたてられた人物でも雲母を服した人士があつて、たとえば隋末から唐初の武人で唐の創業にあたって、王世充や竇建徳らの群雄討伐に大きな働きがあった尉遲恭（字は敬徳）は、その晩年に雲母粉を服用して、長生しようとしたり、はては空を飛ばうとした、という記載がみられる（『新唐書』巻89・列伝第14・尉遲敬徳伝、『旧唐書』巻68・列伝第18・尉遲敬徳伝）。

また、隋末に勢力をもって呉王を称し、のちに唐に帰服したが、最後は反乱の疑いをかけられて暗殺された杜伏威は神仙長年の術を好んで雲母を服したが、それに毒されたという（『新唐書』巻92・列伝第17・杜伏威伝）。

いっぽう『神農本草経』には「鍊餌服之、軽身神仙」と記され（『神農本草経』巻上「雲母」）、すなわち雲母を服すると身が軽くなって、長生するとしており、これに集解を加えた陶弘景（452または456～536）の『本草集注』（あるいは『神農本草経集注』）には雲母の効用として、「耐寒暑」「不老」「軽身」「延年」「志高神仙」などがあげられている（『本草集注』巻2・玉石上品）。

時代は下るが明の李時珍の『本草綱目』「金石部金類」にみられる雲母の項目では、さきにみた『本草集注』巻2「玉石上品」に雲母の効用が数多くあげられている。なかでも久しく服すると、とくに身を軽くし、命永らえるといい、また容貌が衰えず老衰を知らず、寒暑に耐えて志高く神仙となるとされている（『本草綱目』第8巻・金石部・雲母・主治）。諸例の中の端的な仙薬としての描写として『抱朴子』の衛叔卿や『旧唐書』の尉遲恭の記載にみられるように、身を軽くして昇仙をたすけるという認識がある。身を軽くするとは物理的に体が浮くという意味ではなく、体調が良好となって、体が軽く感じられることを指すとも理解されるが、『抱朴子』

「仙薬」の衛叔のように久しく服用して雲に乗って飛べるようになったという例話から、雲母には物理的に浮遊して、そのまま仙去するという効能が認識されていたと考えてもよからう。つまるところ、仙薬としての雲母の代表的な効能が神仙となることをたすけることであることは認められよう。このような雲母にも、雲英、雲珠、雲液、雲砂、磷石などの種類があるが、猛火のなかに入れても燃えることがなく、土中に埋めても永く腐敗しないことから、人をして長生せしめる仙薬たる所以とされている（村上嘉実 1956）。仙薬としての雲母についての神仙関係の記述を概観してきたが、仙人になるための仙薬のなかで、丹や金液は稀少な物質であり、なおかつ仙薬として合成するには錬丹術というような高度の修行や知識と複雑な過程を必要とするものとは対照的に、雲母は鉱物としても一般的であるがゆえに身近な仙薬として用いられたとみることは許されよう。そして、雲母の効能としては長寿や身を軽くして昇仙をたすけることが、主となっていたことを確認しておきたい。

仙薬としての雲母は詩文のなかにもとりあげられ、一例をあげれば中唐の詩人・白居易（楽天）の「簡寂観に宿す」のなかにも「何を以てか夜の飢を療さん、一匙の雲母粉」とある。これは簡寂観という道観において仙薬としての雲母粉を吟じたものである。中年以降の白居易は道教に傾倒したというが（平野顕照 1993）、唐代における心象風景の中の仙薬の描写としても興味をひく。如上の記載からは、雲母が服用される時は「雲母散」や「雲母粉」というように、散薬や粉末の状態のものをを用いるという認識があったことも知られる。

5. 雲母埋納行為の意味

以上の史料と文献によって、雲母の用途と機能は次の三つに大別される。

- ① 身分や威儀を示す装飾品としての雲母
- ② 遺骸保存の役割をもつ雲母
- ③ 仙薬としての雲母

このような雲母の3種の用途について、文献の記載と実際の考古資料とによって、遺骸保全という役割と仙薬としての用途という3種の用い方が実際に存在したことが判明した。これらについて、最後に雲母の用途によって、時期をおいながら整理して例示してみたい。

まず、中国古代の墳墓における雲母使用のなかでも、時期的にさかのぼる事例としては漢墓の雲母埋納が知られる。すなわち、陝西・咸陽師範学院科技工地楼基内1号墓があげられる。ここでは陪葬坑のなかから、大量の雲母片が出土している。この陪葬坑は盗掘を受けており、埋葬当初の副葬品配置はわからないが、少なくとも基底に雲母片が堆積していた状況がうかがえる。

このような雲母の埋納状況は、すでにみた『西京雜記』や『太平御覽』所引「東園秘記」、『搜神記』などを引いて示したような墓内に積み置いたという説話と同じく、実際の漢墓においても、墓底に雲母を敷き置くという行為が存在したことを示している。もちろん、この事例をもって、説話の記載内容の真偽をどうつもりはないが、遅くとも前漢代には墓内に雲母を敷き置くという風習が存在したことが明らかとなった。そのような行為の具体的な意味を論ずるには実例不足の感は否めないが、おそらくは説話に示されるように墓内の遺骸に対し、さらに陪葬坑への埋納から勘案すると副葬品をも対象として、雲母によるそれらの保全が期待されていたという一つの推定がなりたつ。

時代がやや下る墓で、この遺骸保護の役割をもつ雲母の埋納を、具体的に示す実例が、山東・曹植墓である。この墓では棺内に雲母を敷き詰め、その上に遺骸を安置していた。さらに副葬品には「丹藥」印刻銘のある陶罐があり、この墓の葬送思想には神仙思想および道教的信仰が存在したことがわかる。これによって、筆者がかつて論じたように、墳墓における雲母の埋納が神仙思想および道教的信仰によってなされた葬送行為であることが証された。

いっぽう、このように器物の装飾として用いられた例としては、北周・田弘墓があげられる。この墓からは雲母板に金箔を貼り付けた後、忍冬文などの文様に切り抜いた破片 345 点が出土しており、報告書では「輿」または「輦」の装飾としての雲母の使用を想定している。具体的な使用方法は措くとしても、金箔が施された雲母は装飾と考えるほかはなかろう。

北魏の高雅墓では、雲母片そのものにはなんらの装飾も施されていないが、雲母片とともに金箔が散在して出土している。この場合には、雲母と金箔がともに、なんらかの装飾として用いられたという可能性とともに雲母片そのものが遺骸または墓内に散布されたことも想定する必要がある。

さきにあげた北周の田弘墓で出土した金箔を貼り付けた雲母板も、元来は装飾品であったか、または、それが本来付属していた器物から取り外されて、墓内に散布された可能性も考えられる。

南朝墓では江蘇・丹陽呉家村南朝墓で銀製装飾品とともに雲母が出土しており、これも河北・景県高雅墓と同じく装飾あるいは雲母片そのものの埋納という両様の可能性が考えられる。

また、南朝墓出土の雲母で注意すべきは南京・仙鶴觀 6 号墓西棺から出土した鍍金銀製鼎の内部から出土した資料である。すでにふれたように、これは散葉状を呈した雲母片であり、文献に雲母粉としてみえる仙薬と考えてよからう。

その他の漢代から両晋南朝墓から出土する雲母片については、未だ知られる事例

が少ないことを勘案しても、金箔などの装飾を施された例が知られていない。これらについては、事例の少なさと詳細な報告のないことから、断案はさけたいが、雲母片そのものの埋納が中心となっていた可能性がある。

このように実際の出土例からは、前漢代には墓内に雲母そのものを散布する習俗が存在したことが知られた。また、その後の南北朝期には明らかに装飾としての雲母の例もみられる。これらの墳墓出土の雲母から、古代における雲母埋納の意味について、現状における見通しを述べておく。すなわち、漢代に雲母が墳墓に積み置かれる状態で埋納され、魏晋の時期にも同様にそのような埋納の様相を経て、南北朝時代になると、このような埋納とともに、雲母片に金箔などの装飾が施され、おそらく、なんらかの器物や皮革製品あるいは布製品の装飾としても用いられたと考えられる。

このような変遷が想定される中国古代墳墓における雲母の埋納は、『西京雜記』などを引いてみたように、当初は遺骸保存の意味を期待されていたのであり、それが変容して装飾の一部としても用いられたと推定される。そして、このような雲母使用には神仙思想および道教的信仰における仙薬としての意味が、その基底に存在するものと思量する。

まとめ

本論では、まず、東アジアにおける古代墳墓出土の雲母に関する研究史をみた後に、漢代から南北朝時代にいたる墳墓から出土する雲母片の実例を瞥見し、文献記載から同時期における雲母の使用法を概観した。それによると雲母には、装飾、遺骸保存、仙薬という主な使用法および用途があることが知られた。そして、実際の墳墓出土例においては、漢代墳墓では墓内に散布された例があり、曹魏の曹植墓では棺内に敷き置かれる状態で雲母が用いられていることから、漢代から引き続き行われた遺骸保存のための機能を期待されたと考えられるが、曹植墓より伴出した「丹薬」銘陶罐に示されるように神仙思想および道教的信仰と関連していたことがわかった。その後、南北朝期の墳墓からは、金箔や漆を施し、穿孔された雲母が出土することがあり、文献では手風などに用いられたとみえる装飾としての雲母の実際の例を示している。ただし、南京・仙鶴観6号墓のように、鍍金銀製鼎に雲母碎片をいれて、副葬された場合は、服用のための仙薬としての雲母の用途があったことを端的に示している。

これらの例のように、時代により、遺骸保存から仙薬そして、装飾品へという大まかな流れはあるにしても、神仙思想およびそれにもとづく道教的信仰によって、中国古代墳墓に雲母が散布され、あるいは副葬されているらしいことが予想された。

本論であげた雲母出土墳墓の例はわずかであるが、端緒としての論を提示し、諸般の教示をえて、今後、資料を集成することによって、ここで示した仮説をより実証的な論へと展開させたく思う。

(引用文献)

(日本語文献)

- 有光教一 1935「慶州皇南里第八二号墳第八三号墳調査報告」『昭和六年度古蹟調査報告』第一冊，朝鮮総督府，のち『有光教一著作集』第3巻，同朋舎，1999年所収。
- アンリ・マスペロ 1966『道教—不死の探求—』川勝義雄訳，東海大学出版会。
- 大形徹 1992『不老不死—仙人の誕生と神仙術—』講談社。
- 梅原末治 1932「慶州金鈴塚発掘調査報告」『大正十三年度古蹟調査報告』第1冊。
- 窪徳忠 1948『道教と中国社会』平凡社。
- 平野顯照 1993「白居易壮年期と道教」『大谷学報』72-3。
- 門田誠一 1999「古墳出土の雲母片に関する基礎的考察—東アジアにおける相関的理解と道教思想の残映」『鷹陵史学』25，のち2006『古代東アジア地域相の考古学的研究』学生社，所収。
- 村上嘉実 1956『中国の仙人—抱朴子の思想』平楽寺書店。
- 吉田光邦 1963『錬金術』中央公論社。
- 吉田光邦 1972『中国科学技術史論集』日本放送出版協会。
- 吉川忠夫 1995『古代中国人の不死幻想』東方書店。

(韓国・中国語文献)

- 王志高・周裕興・華国榮 2001「南京仙鶴觀東晋墓出土文物的初歩認識」『文物』2001-3。
- 河南省文化局文物工作隊 1958「河南泌陽板橋古墓葬及古井の発掘」『考古学報』1958-4。
- 河北省文物管理所 1979「河北景県北魏高氏墓発掘簡報」『文物』1979-3。
- 甘肅省敦煌県博物館 1983「敦煌仏爺廟湾五涼時期的墓葬発掘簡報」『文物』1983-10。
- 原州聯合考古隊 2000『北周田弘墓』勉誠出版。
- 護善煥 1996「曹植墓磚銘釈読浅議」『文物』1996-10。
- 謝明良 2006『六朝陶瓷論集』国立台湾大学出版部。
- 南京市博物館 2001「江蘇南京仙鶴觀東晋墓」『文物』2001-3。
- 羅宗真 1957「江蘇宜興晋墓発掘報告」『考古学報』1957-4。
- 劉衛鵬「陝西咸陽清理一座大型漢墓」『中国文物報』2006年7月14日。
- 劉玉新 1999「山東省東阿県曹植墓の発掘」『華夏考古』1999-1。
- 南京博物館 1980「江蘇丹陽県胡橋，建山兩座南朝葬」『文物』1980-2